
NOW HERE ~ 傍観者 ~

0 ~ マル ~

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

N O W H E R E 〽 傍観者 〽

【Nコード】

N 2 6 4 9 F

【作者名】

0 〽 マル 〽

【あらすじ】

自分の生活は平坦だ。本を読んで夜に日記を書く。それくらい。交友は別に必要としない。ただ受動的に受け答えるだけ。そんな自分に寄って来る男、小早川が恋愛相談を自分に持ちかけてきた。

第一話 「自分と彼とあの子」

NOW HERE 〔傍観者〕

第一話「自分と彼とあの子」

自分はどちらかというと交友に積極的な方ではなかった。一日の多くを書物に費やしてもかまいやしなれないと言っていいほどだ。だが自分を文学少年だと勘違いしないで頂きたい。部屋中ハードカバーの本で埋め尽くされているわけでもなく、ましてやそれらしい大学を志願して著名な師の元で文学史を学ぼうという気には到底なりやしない。本はあくまでも暇潰しでしかないのだ。まあ、娯楽という事には変わらないが、感銘をうけた！ 生き方が変わった！ 名作をありがとう！ と言った感動を抱く気持ちにはならないのだ。それに読書だけが趣味なわけではない。携帯で日記を書くのも日課である。もちろんその日記の存在を知っている知り合いはいないのだが。一日を過ごして行く上で余分な時間を読書にあてているだけだ。

「おおーっす、水谷！ 今度は何を読んでるんだよ。また表紙が変わってるじゃないかあ」

「今回は学園物語だ」

「学園物の頻度多いねえ。おい、お前主人公を自分に当てはめてハッピーライフな夢でも・・・」

「そこまで妄想豊かではないし、そのような趣味もない。自分はこれで満足している。お前はどんなんだ」

「まあ、俺も楽しい。お前に会えて何よりだ」

本を閉じて、自分は彼の下らない冗談に答えた。彼も言っていたように、自分の名字は水谷という。今後自分の語りの中で自分の名前が出ることはないだろう。何故ならば人々が自分の名前を知らない、

というかむしろ興味がなからだ。一切呼ばれることはないのだから、自分の名前を明かすことは単なる自己主張とみなす。名前は勝手に想像してくれ……ってほら。名前になんか興味ないだろう？

教室のドアを大げさに開き、駆け足で自分の席に向かい、早々慌ただしく話しかけてきた彼は 小早川 徹 という。高校二年に進級してから二週間余り、彼は一応友人という枠に入るらしい。新しいクラスに一番に到着したのが彼だったらしく、二着目で教室に入ってきた自分を見て直感的に本能的に第六感で自分と話したいと考えたらしい。すぐさま自分に寄ってきて突如冗談をかましながら自分に話し掛けてきた。初対面の相手にする行為だろうか。既に彼はこのクラスでは基本的に誰とも話せる立ち位置にいる。進学して間もないと言うのにクラスの人のアドレスのほとんどを聞きにいつて取得したらしい。しかし、実際欲張り過ぎたのかオールマイティすぎたのか、彼にとつての落ち着いた場所、つまり一緒に昼飯を食べるような固定メンバーは逆にできず、今もこうやって自分に話しかけてきたわけだ。アドレスは得たが何も手に入れてない、同情の余地の有無は別として哀れなやつだ。

それに比べて自分は交友には消極的だ。だが、わざわざ話してくれるクラスメートを見捨てるほど病んではない。ただ、冒頭で言ったように、自分は今一つ交友に率先して取組む気がでない。それは、今このぬくい場所が丁度いいからだ。適温適度。他の人からすれば少し肌寒いかもしれないが。一応話はする。でも踏み込みたくはない。そして、孤独になってもいいと思っている。孤独を嫌わない人間だ。自分はこれ以上の関係を元より欲していないのだ。そしてこの関係は最大限であり、満足なのである。いつ小早川と離れたって悲しくなりはしないだろう。小早川が今この度自分に話し掛けてこなくなっても、きっと寂しい気持ちにはならないのだ。

「水谷、クラスの子なんだが、あの子可愛いと思わないか？」

「いつも休んでいる子か。確かにあれは美人さんだな」

「新クラスが始まってから一週間も経つというのに、俺はあの子にはまだアドレスを聞けてもいない」

「犯罪しない程度に近寄れば良い。お前のキャラだ。話せる仲にまではないけるだろうよ」

「違う！ お前だから打ち明けよう。俺は恋というものをした。激しくな。波が岩にどつかーんって感じた。あの容姿、大人しそうにしていることから察せる性格、ついでに声も俺の直球ど真ん中を打ち抜いたのだよ」

1年生のときに同じクラスで無い限り、クラスメートとは会って7日間しか経っていない。その僅かな期間で恋愛対象を見つけてしまった彼をどういう目で見たかという点、幸運なやつだなと思うことはなく、気の軽い男なのだろうと侮蔑の感情を抱いた。だが到底発言する気にはならない。面白半分返答をするのが一番無難である。そうやって自分は生きてきた。

「犯罪は反対だ」

「真面目に聞いてくれ、頼む！ どうすればいいのかな」

自分は一応考えてあげた。彼女の名前は 夢宮 楓 というそうだ。小早川が連呼するせいで脳に無駄な情報がインプットされちまった。確かに顔立ちは綺麗だ。これは活字と格闘し続けていた自分の目でさえもそうはつきり言える。彼女はクラス替えをしたその日にも休んでいた気がする。自己紹介しているところを見たことがない。きつと病弱なのであろう。気の毒だ。そのせいもあってか、彼女が人と喋っているところをなかなか見かけない。

小早川は繰り返し自分に夢宮の容姿を説明する。彼女の鼻と口は小

さめで落ち着いていて、目は二重。ぱっちりしているが上目遣いは似合わないような清楚な雰囲気醸し出している。眉毛は上品に整えられ、眉毛専門美容院で二時間掛けて剃ったんじゃないかと疑いたくなるくらい似合っている。髪色は当然黒、むしろ色染めは似合わない。髪型でセミロングの定義は分らないが、髪はそれより少し長めのような。大分控え目なパーマが掛かっていて、一度走ればさらさらふわふわと靡くように思われる。前髪は絶妙な位置で分かれている。しかしやはり清楚だ。身長は155くらいでスタイルは抜群である。少し大人になれば美しく可憐な女性になるだろうが、高校生ということもあって、彼女を表現するのに「可愛い」という形容詞は適切であった。

「それでな、黒くて通気性良さそうなニーソックスとスカートの間から覗く肌は……んぐうつ」

自分は暴走する小早川の口を止めた。危ない。周りに聞かれたら自分まで変質者だと思われる。無視は構わないが、噂が立つのは好きじゃない。いつか彼は犯罪者になるのではなからうか。犯罪大国日本、犯罪を未然に防ぐために警察に今の発言を録音して提出してやるうかと考えた。まだ会って間もないのは自分と彼も同じことが言えるが、既に彼の手からは犯罪臭なるものが香ってくる。

「あの美人さん、お前にや無理だ。今思った。自分を知らう」

「五月蠅い！ 俺は夢宮と仲良くなりたい、あわよくば付き合いたい。今まで人と付き合ったことは無いが……」

心の中ではそう思いつつも、自分はこの件に関して良い展開を期待しているのが本音だった。なんせ、リアル空間は生きた小説だからだ。これもあるから、自分は本に全てを捧げるつもりはないのだ。体は現実世界に置き三次元は適度に、空き時間は二次元（本）を楽

しむ。だが、本だけでも生きられなくは無い、それだけだ。小早川が犯罪さえしなければよいのだ。しかし彼の容姿は申し訳ないが、夢宮とは不釣り合いである。整った顔立ちではあるが、進学そうそうクラスの異性に騒がれるような顔じゃない。髪型はそつなくこなしているようだが、やっぱり頑張ってもスポッライトは浴びてはいけない顔だろう。身長は一応170以上あるそうだが。実際付き合うのは無理だろう。小早川のキャラなら仲良い関係にまではいけなさそうでもないが、恋したのが運の尽きだ。だが小早川にとってこれは本気の恋だったらしく、どうにかしてキツカケを作ろうと必死になって何かに励んでいるが、いざとなると臆病な性格であるからなのか、全く手だしできずに悶え苦しむ様子が嫌というほど目に写った。しかしそんな滑稽な彼の姿を見るのは時間つぶしに適していて、この何の進歩もない彼の一人芝居の観客であり続けることも悪くないとも考えていた。そんな淡い自分の期待を裏切るように小早川にチャンスが巡ってきてしまった。いや、巡ってくれたのだ。喜んでやろう。

先生と一対一で進路について話し合う二者面談で、夢宮の次が小早川だったのだ。小早川は夢宮に話しかけようと、少し早い時間から教室の前で待機することになっていたのだが、隣のクラスで同様に二者面談を待っている人の目を気にしてしまい、結局のところ何も話すことはなく夢宮は先生に呼ばれると吸い取られるように教室に消えていったという。要するに彼は食用鶏よりも鶏に似つかわしい存在であつたようだ。しかし彼の話は続く。小早川も二者面談が終わり下校しようといつもの下駄箱の位置まで身を屈めながら外を見ると予報されていない雨が振っていて、困った顔をした夢宮が傘無し状態で校舎内に佇んでいたのだ。その後ろ姿は無防備で愛らしく、鍵の掛けられたお城の一室から外の世界を想像しながら窓に手を当てるお姫様のようなだったそうだ。一生に二度と無い絶好のチャンス。しかし小早川の足も止まっていた。自分の顔にもう少しの自

信があれば、彼はいつもそういつ言い訳をする。夢宮は人影に気付いたようで小早川のいる後ろを振り向く。髪はさらさらふわふわと摩く。しばらく見つめ合うこと数十秒。

「傘…、入りませんか？」

その時の彼は実に紳士であつたと本人は豪語した。紳士ならば傘を渡して濡れながら走り去ってほしい。すると夢宮は感嘆の声を露にし、満面の笑みをこぼしながら首を軽く前に降って「ありがとう」と澄み切った声で礼を告げたと言うのだ。一緒に一つの傘の下だ。小早川得意の話術で話は結構盛り上がったらしい（彼は女子との会話に定評がある）。最後にはアドレスも聞けたそうだ。そして小早川は彼女からの最後の一言で何かを確信したらしい。

「誰にも教えてないんです。このことは秘密にしてね」

失神寸前だったそうだ。自宅の方面が違つたため駅のホームで別れを告げたそうなのだが、小早川はしばらくそこを動けなかつたらしい。

「お前よ、この発言をどう取るよ、おい！」

「秘密にしろと言つたのに俺に言つたじゃないか。大丈夫か、それで」

「いや、会話の流れるには、五月蠅い男子に知られてアドレスを聞かれるのが嫌なそうだ。お前はそんなことしないのは俺が一番良く分かつているさ。ちよつとさー、浮かれていいですかね、ホント」
「あまり浮かれない方がいいぞ。というかまあよくもアドレス聞けたもんだ。あの子、高嶺の華でありすぎたのだろう。お前のように無謀なヤツがいなかったのかね」

「そうみたいだ。メールも盛り上がったよ。しまいには、安心して話せる人がいなかったたので嬉しいです、だってさ」

「告白してみたらどうだ」

「いや、ムリだろ！ 地元に彼氏いるかもしれんし、まず俺は付き合ったことがない上に人を幸せにするなんて今の俺には無理だ」

確信したのではないのか、彼の発言をいちいち記憶していた自分にとって彼の発する矛盾は目に付くが、恋に溺れる少年はそんなものだろうと割り切った。彼は青春まっしぐらなのだ。自分がいつしか忘れた感情の一部である。夢宮さんの姿をふと見てみた。教室の後ろの端っこで次の授業に必要な教科書類をせかせかと机に並べて、携帯を開けたり閉めたりを繰り返している。ちなみにその背筋は真直ぐだ。やはり彼女が人と話しているのはクラス替えしてから間もない時だけだったな。他の人が話し掛けて、でも話は盛り上がりないうちに終わって、それからそいつは夢宮に話しかけていなかった。

それから自分の読書時間は極端に増えたような気がする。休み時間、小早川はいそいそ携帯と睨めっこしている。同時に夢宮を見ると、こちらもまた小液晶画面に目が一点。どうやら二人の間でメールの交換のブームが到来したようだった。直接話せばいいものの。

・・・ま、どうでもいいか。すぐに自分は活字に目を移した。

第二話 「二人と一人」

NOW HERE 〔傍観者〕

第二話「二人と一人」

小早川が夢宮と話せるようになってから数日後、五限目最後のチャームが鳴り響き今日一日の学校生活もようやく終わりとなった。担任がさつきまで授業していた教師と入れ替わるように教室に入って教卓の前に立つなり号令の合図を促した。自分は本の続きを待ち切れず、机を壁にページをめくり始めた。号令係の一声により再度立つ。既に礼とは思えない一回のお辞儀。頭を下げながら各々掃除や帰りや部活の準備を行う。所詮、公立高校部活動の分際が何を張り切って汗水流さなくてはいけないのだろうか。天気予報をいちいち気にして「雨だ、部活オフだ！」と手にガッツポーズまでして喜ぶ彼らの野望やらを知りたい。もっと時間を有効に使えないのだろうか。中途半端に行う運動など意味はたいしてない。自分だったら、嫌々参加している運動部など即退部届を出して読書に割り当てる。彼らの姿は退職金のためにいそいそと仕事する中年サラリーマン（下っ端）の姿に類似するものがある。つい出てしまった嘲笑する顔を片手で隠し、もう片手には本を持ち、机運びは係に任せて廊下を目指して歩き出した。大抵このドアの二歩手前で小早川が自分の肩を掴み、一緒に帰ろう、の一声を掛けてくる。しかし今日は来ない。別に振り向く理由もなく、ましてや不安になることは決してなく、部活動無所属の自分は文字を追いながら順調に昇降口まで歩いていった。

自分の目が羅列する文字から離れたのは、下駄箱に着いた時だった。自分の下駄箱の番号を探すため、一度本は指の朶でとめておいた。靴を取り出しているその時、目に映った姿は既にドアの外に出てい

た二人であつた。小早川と夢宮である。二人で帰ろうとしているところだった。自分は靴を履き、外に出た。もう自分も彼らも道路を歩いている。小早川は理想の異性と一緒に帰れる仲にまで発展したらしい。邪魔してはいけないと自分は幾らか歩調を遅めようとするが、夢宮の歩幅の小ささには敵いそうにない。牛歩とは言わんぞ、牛歩とは。彼らを気にするばかりに本に目が自然と離れてしまう。立ち止まったり一本道をジグザグに歩いてみたり、追い付かないための努力を幾らかしてみた。遂には小早川に気付かれるまで。

「おお水谷。帰宅部は楽でいいよねえ。こんな日の明るいうちに帰れる」

「うお、小早川」

夢宮は軽く握った手を口元に寄せて当惑の表情を見せる。分かりやすい。自分はここで言葉が詰まる。「失礼」なんて語尾に笑いを含めながら言えば嫌味になるし無駄に煽るだけだし、そもそも自分と小早川は普段一緒に帰っているので通り過ぎる時点で不自然だ。そうとも言つて他の言葉行動の最善策は見当たらない。しかし流石というべきか、水谷は切り出した。

「夢宮さん？ 紹介するよ、前言ったけど、俺の友人の水谷。見た目根暗に見えるけど、実際は面白おかしい良いヤツだよ」

「えっ・・・あ・・・水谷・・・くん？ よろしくお願いします・・・。私、夢宮楓といいます・・・」

「ああ、おっ、おう」

お前は何様だと問いたくなるような紹介をされた自分は作り笑顔にしては上出来な笑みを浮かべて挨拶をしておく。三人とも帰宅部だった。部活動に熱心な九割九分の健全なる生徒は活動に夢中だ。やっぱり運動することに意味があるのかもしれないな。おかげで帰り

道は自分たちしかない。かくして、これが自分と夢宮とのファーストコンタクトとなり、三人は列を連ねて帰る事になった。

「おい、水谷、足速いぞ」

「あ……、そんな気にしなくて大丈夫だから……私が遅いだけで……ごめんなさい……」

「夢宮さん……謝る事ないですよ、自分が悪い。よく他の人にも言われるし」

「私、昔から体が弱いんです……」

「気にしなくて大丈夫だよ。まったく、水谷のやつは」

割りと落ち着いた雰囲気の話から始まった。なんだか申し訳ないことをしたが。自分は本をバックの外ポケットにしまうが、自ら話題を振ることはない。夢宮から話し出すこともなく、小早川の一言から話しがすすむ。会話は意外と途切れずにすすんでいる。

「病弱なのか……。気の毒に……。あつ、でも、小早川と話せてクラス今楽しいでしょ」

「ええ、とっても」

点描シャボントーンが彼女の背景を飾った。この笑顔は反則級だ。某ファーストフード店ではその全商品を買い合わせても届きそうもない値段で売買されそうなスマイルだった。0円なんてとんでもない。この子を侮辱する言葉など見当たらなない。

「私、だから……、クラスでもなかなか話してもらえないの……。最初から休んじゃったし……。元気な女の子になりたいなあ……。……」

頬を赤く染めながら夢宮は両手で掴んでいる革素材のバックを見る

ように下を向いた。夢宮が人とまともに話せない理由はそれだけじゃないと自分は考えている。この容貌だ。それに大人しい。きつと今まで話してきた男子勢は彼女に波長が合わなかったのだろう。自分のクラスメートは良く言えば明るく元気なクラスと称せるだろうが、自分は客観的な意見を言わせてもらうと全くそれは不適な形容であり、率直に「五月蠅い」の一言に尽きるのだ。ハエのようなク拉斯の連中がナンパまがいな行動に出ても、夢宮が下を俯きながら細い声でごめんなさいと言っている様子が容易に想像できる。その中で小早川は場に応じてわきまえる心を知っていて、まあ夢宮に恋したからでもあるとか、常に自分と共に行動していたから騒がずにすんだのだろうか、夢宮は小早川を受け入れてくれたのだ。自分は脳内台詞の所々を摘み採って夢宮に聞いてみると

「確かに話し掛ける人はたくさんいました……。でも私なんかじゃ……。って。うん……。」

さつきから下向きの発言を繰り返す夢宮。謙遜しなくてよい。あなたが悪いのではなく、話しかけてくる彼らが気持ち悪いのですよ。夢宮の発言にフォローを入れる小早川。彼から彼女に話題を振り、今日初めて会った夢宮と自分が互いに互いを聞き合うような会話が続く。どうも小早川がそうなるように上手く話題を仕切っているようである。大した奴だ。

「その……。携帯電話は持っていたのですが……。メールはしたことがなくて」

夢宮は小早川とメール交換できることをたいそう喜んでいる気持ちを露わにしていた。小早川の進んだ一歩は彼にも夢宮のためにもなかったらしい。恐らく彼女は独りでいることに慣れつつも、自分と違って孤独を好かない人なのであろう。小早川と話せたことがよほど

嬉しかったのだろうな、幸せが伝わってくる。

「あ、じゃあな。気をつけて」

どんなに遅くても歩いていることには変わらない。話しているうちに駅に着いたようだった。小早川が夢宮に手を振った。合わせて自分も手を振る。これは礼儀というものだ。する事に意味がある。

「さようなら。また明日」

駅を歩く人にいちいち観覧料を請求したくなるような笑みをまた浮かべる。その微笑みはもう癒しの域に達している。夢宮はその場で手を振って小早川を見送っていた。徐々に彼女の姿が小さくなっていく。自分と小早川は後ろを向きながら歩き、同じくして手を振った。階段に差し掛かった時、自分たちは目線を前に向けて既に停車している電車にめがけて走っていった。運良くイスに座ることができ、重いバックを地べたに置いて向かい側の窓を向いた。夢宮がゆつくりと階段を下りてきているところだった。あまりにも慎重に歩いているものだからつい手を貸して一緒に降りてあげたいと小早川は心配そうな目を向けながら呟いた。自分たちを乗せた電車が出発すると、夢宮はまた手を降ってくれた。小早川は返す。手を振る愛くるしい夢宮の姿を見届けた後、小早川は誰にも聞かれないだろう声で自分に話した。

「まあ見ての通り夢宮さんは落ち着きのない連中をあまり好まないようだ。クラスではあまり話し掛けないでくれだとさ。それを機に他の人に絡まれるようなことがあると困る・・・とさ」

「・・・ごめんな。自分、今さっき夢宮と話しちゃったじゃないか」
「いや、それは大丈夫。俺の友人ということで話題には上げていた

し、お前の静かさだ。嫌なわけでは無さそう」

「ホントは二人きりがいいんじゃないのか？」

「ですよー。・・・だと嬉しいよな・・・」

小早川はニコニコ顔でそう言った。そして上を向くなり将来を見透かしたような表情を見せた。

「告白はしないのか？」

「まだ会って間もないんだ。俺は最初から好きなわけだったが、彼女から見たら俺が軽い人間と見られるだけさ。慎重に・・・だ。それに、今こうやって話しているだけでも幸せなんだ。それを、気の焦った行為によって壊したくはないんだ」

「確かにそうだな。まだ内面を見て間もない時期だからな」

「そうだ。まあ実際性格は俺の見抜いた通りだった。時期が経ったら告白したいんだが」

「自信がないのか」

「自分にも、な。告白したところで何がどうなるかも分からない」

「お前らしくないな」

「いや、仕方ない」

やはり経験が無いのは相当痛手のようだ。一回でも告白されるといふ華やかな過去があれば自分にどれだけの自信を持つことが出来るだろうか。まあ自分にそんなことは関係ないのだけれども。

「じゃあな、ばいばいだぜ。また明日学校で、だ。あとそれから、明日一緒に昼飯を食おう」

「おお」

小早川はそれだけ言って電車を降りて行った。自分の駅はあと五つほど先の遠いところにある。外バックにしまっていた本を取り出す

と栞を入れ忘れていたことに気付き、ページを振り返ってみると数ページ先の展開部分が目に写ってしまい意気消沈しながらもようやく読むべきページを見つけると、自分は深呼吸をしてから文字を読み進めることに集中した。

第三話 「今 ここにいる」

NOW HERE 〔傍観者〕

第三話「今 ここにいる」

自分と小早川、そして夢宮とで一緒に帰った最初の日から数日経った日のことだ。もう既に夢宮が二人以上と一緒に帰るのは日常化され、自分と夢宮も少しだけ話すことが多くなったように感じる。もちろん自分から話すことはないし、教室で話すなんてもつとあり得ない。小早川が振った話題に乗っかる、それくらいのことしかしていない。三人で帰る時は決まって周りの道には誰もいない。みんな部活だ。おかげで夢宮が人と話しているところは目撃されずに済み、教室内での夢宮は一見いじめられているかのように隅の机でじつとするばかりだった。まあこれは夢宮が望んだことなので、その言うとおりにしてあげようというのが小早川の配慮だった。彼のことは本当は学年一の美人さんと親しい関係にあると言うことを鼻高々に自慢したいに決まっている。日が経つにつれ、夢宮の可愛らしい性格がよく出てきたのか、小早川が夢宮を好きになる度合が強くなってきている。それに比べると自分は恋愛の意味では何の感情も抱くことはなかった。ただその美しい要望と澄み切った声により目の保養及び耳の保養に貢献してくれる存在ということで彼女との時間は重宝していた。だからと言ってわざわざ彼女に近づくこともなければ一緒に帰るときに話題を振ってみるだとか一切しない。あくまでも自分は自分のままだった。純粹に小早川の恋愛を応援するくらいだ。応援といっても何もしないのだが。

「なあ水谷。なあなあ水谷。水谷君、水谷君。聞いているのかね水谷君」

「やけに騒がしいな。『なあ』の時点でお前の声は認識している。」

なんだ」

「俺な、えつと、うん、夢宮がな、今見たい映画、劇場、スクリーン！　があるとかないとかって話をしているんだよ、夢宮が、」
「一緒に行けばいいじゃないか。テンションを無理やり上げているのか？　お前今日どうした」

「うるさい。ここ最近まともに寝てないんだ。誘うか誘わないかで」

今日は自分も込みの三人で帰り、夢宮と別れを告げてから電車に乗った。今日は優先席が空いていたので堂々と座ることにした。自分が先陣切って重い腰を下ろすと合わせるように小早川も座った。・
・優先席など存在しなくてもよいと思うのは自分だけだろうか。優先席以外は優先しなくてもいいですよと言っているようなものではないか。それに以前、自分が遠出をしたときに普通の席を座っていたら、体に皺こそあるが両手に買い物袋をぶら下げたお婆さんが「若い少年よ、私に席を譲って下さる？」と言ってきたので「優先する席ではないので自分は席を譲りません」と言っちゃったら周囲の人は一斉に自分を見つめてきた。空気が固まったようで、電車のアナウンスだけがむなく響いていた。お婆さんは自分を嘲笑ってか「こういった。」「私はまだ若いよ、優先席に座らないわ」だった。最初から立てばいい。しかしお世辞にもそのお婆さんはどう見ても若くは見えず、何もしていなければ勝手に人が普通の席でさえも譲ってもおかしくないような容姿だったのだ。その他もろもろ、以上のことから、優先席は電車会社の自己満足、世間体にはアピールした無意味な空間であるといえるだろう。

「おい・・・水谷？　聞こえてるか？」

「あ・・・いや、何のことだ？　悪い。お前の声を認識していなかった」

「何考えてたんだ」

「何でもない。そつだ、映画・・・なんだろ？　本当にどうするつ

もりなんだ」

「二人で行きたいけど、二人で行くのはどうもデートみたいで、なんていうのかな、例えるなら告白してないけど卒業式で憧れの先輩からボタンをもらう行為とさほど変わらない・・・みたいな感じがしてならない」

「なるほどね。デートするくらいなら告白が先だと。んで、お前のことだからまだ告白もできやしないと」

「その通りだ。よくもまあ代弁してくれた。お前読心術をどこで手に入れた」

「いや、常識的に考えてそうなるだろ」

「・・・そういうものなのか」

自分が普段から日常会話の中で曖昧で分かりづらく、しまいには国語の教師には間違っていると指摘されかねない比喻表現を使っていたのがアダとなったか、小早川にも浸透してしまったらしい。まあ確かにそうだ。デート行くくらいなら告白してからの方がいい。もしくはデートの後に告白しないのはあまりにも意味がなさすぎる。決してどこかで読心術を習ったわけではないが、この流れからして小早川は「三人で行こうぜ」みたいなことを提案してくるだろう。自分は構わないが、仮に夢宮が小早川のことを少しでも好いていたらどう思うだろうか。さぞかしシヨックであろう。チキンがいずれ人を傷つけていくのは目に見えている。

「あのさ・・・」

「『三人で行こう』とか言うなよ」

「・・・お前本当にどこで読心術を取得したわけだ」

「お前の性格はたかが知れている。ようするにチキンだ。もうここはデートに誘って、告白してこいよ。適当な映画観て、ファーストフードでもなんでもいい。適当なところ食べに行って、帰りに公園でも寄って告白すればいい」

しばらく小早川は黙り静まって、深刻そうな眼つきをして下を見つめた。何やら独り言を呪文のようにぶつぶつ唱えている。自分に何かを言い聞かせているのである。これは勝負時なのだ。小説みたいに彼女の方からイベントを用意してくれるとは到底思えない。現実とはことんリアルなんだ。案外あっさりとした結末を迎える。自分から何らかのアクションを起こさない限りあの手の子は何もしてこないだろう。なおも小早川は電車に揺れながら熟考する様子。心臓が鳴り響いているのだろうか、胸のあたりをたまに平手で抑えている。本当に分かりやすい人だ。

「決めた、そうする。映画見に行った後、告白する」

「よく言った。お前は鶏卒業だ」

「おう。明日土曜日だからね。明後日、日曜日。俺は思いを告げることにする」

「いい答えを期待しているよ。頑張れ」

すっかり週末だということを忘れていた自分は、明日から始まる二連休の有意義な過ごし方を考えるだけで今日一日は堪能できそうだなと考えていた。丁度今日の4時間目あたりに本が読み終わったので古本屋で買い足そうと考えていたところだ。同時に読み終わったのは売って、だ。そうだ、読書リストにも記入しなくちゃ。（読書リストとは、今まで自分が読んできた本を独自にパソコンに記入しているエクセルページのこと。同じ本を間違って買うのを防ぐのに大いに役立っている）自分は数々の期待を土日に抱いている。朝早くに起きれば十二時間以上の時間を読書に回すことができるからだ。まさに至福と呼ぶべきだろう。時間は有効に使いたい。有言実行を成し遂げる男だ、自分は。既に電車の中にんまりしていた自分に小早川はお別れの定型句に月曜日のお昼時間の約束を取り付けると、若干のスキップを交えながら電車を降りて行った。よほど心が軽く

なったのだろう。駆け足で階段を走り抜けていった。外ポケットに手がかかったところで本を読み終えたことに気付き、土日の妄想に耽ることに専念しようとした。

・・・日曜日。

土曜日の大体夜九時くらいだろうか、携帯で日記を書いていると小早川からメールが来た。土日は早寝早起きを目標としている自分とはつきり彼のメールに気付かなかった。まあ気付いたところで返信するかは別問題だ。家にある本が全てなくなるという異常事態が起きて時間を持て余している時以外にメール返信することはないだろう。面倒くさい。直接話せ、直接。彼のメールの内容はわざわざ書いてくれた件名により大体の内容を推測することができ、メール本文もその通りの内容だった。

『件名： あは！行ってきましたw』

『明日夢宮と都会に行くぞ。付いてくんよ、ストーカー反対だぜ。お前が言った通りの日程だ。よっしゃ、頑張るぜ。』

P S 彼女の私服はお前には見せん』

大分浮かれているのが分かるだろう。生まれて初めての経験なのだろうな。週明け早々自分の机にへばりついて「俺は終わりだー」など言っている様子が容易に想像できるが、彼が妙に緊張してスベらないことを祈ってやることにしよう。さて、土曜日に欲しい本を探しにわざわざ自転車で十数分かけて出向いたわけだが、欲しい本がほとんど見当たらず妥協して購入した本も全て読み終えてしまったのだ。よって日曜日はすることがなくなってしまったのだ。同じ古本屋さんが一日二日で大量入荷するとは思えない。行くだけ徒労に終わるのは目に見えたことだ。やることもないので、これまでの夢宮さんの行動を思い返して安らぎをいただくことにしよう。

「夢宮さんはいつもお弁当どうしてるんだ？」

小早川と自分と彼女の三人で村興しをした方がいいんじゃないかと思っくらしい人気のない道を歩いている時のことだ。小早川が夢宮に向かつてこんな質問をした。小早川は流石だった。しっかりと好きな人のお弁当にまで監視の目を入れている。いつか非通知で電話をかけて「もしもし、どなたですか？」の一言（それはもう綺麗な声だ）を聞くために電話料を気にせず何度も電話しかねない、いわばストーリーカー予備軍に入団できそうなレベルにまで達しそうであった。「あれは私が作ってるの・・・！」

夢宮は普段から対面していないと判断できないだろう強気の表情を薄らと浮かべた。その返答に過剰反応したのは当然小早川で、キツチンに立っているだけで餌をくれるのではないかとご主人様の足元で強請る猫のように目を輝かせた。それに悟ったのだろうか、いや、悟っては無いだろう。夢宮は「今度作りましょうか・・・？」と丁寧語を交えて聞いてきた。

「まじで・・・！？ あ、ありがとう！」

それは夏の日に甲子園で優勝したチームのキャッチャーのように今にも泣きそうな目だった。夢宮は暖かな微笑みを浮かべて小早川の顔を見ていた。これが春というものだろうか。こんな出来事が現実にあるとは。小説でも見たことがない。

次の日、早速夢宮はお弁当を用意してきた。後日、小早川が勢いで撮ったお弁当の写メを見たのだが、そのお弁当を描写するのに要する文字は軽く一万文字では足りないだろうからここでは割愛させていただく。そのお弁当はいかにも女の子らしく、うん、もうこれは彼女が彼氏に作ってくるラブ弁当そのものだった。ハートの形をしたおかずがないのはまだ付き合っていないからだろうが。そこまでしてくれた夢宮に何故小早川の馬鹿は告白をすぐにできなかったのだろう。そのお弁当の渡し方がまた可愛らしく、自分の机の前でお腹を鳴らしている小早川の元にメールの一通を送って、ある部屋まで

来て、と呼びだしたのである。よほどクラスの人に見つかりたくないのだろう。自分は緊張する小早川のために途中まで同行する羽目に合い、二人きりの状況を後ろの方遠くでちらつと見ることになったのだが、ああ、アイツはなんて幸せ者なのだろう。夢宮はもしもじしながら小さな手でお弁当箱らしきものを掴んで、腕を伸ばしきってお弁当箱を彼の胸のあたりに差し出した。きつと「どうぞ・・・。おいしくなかったらごめんね」とかの言葉を付け足して。味に關しては言うまでもなく、小早川は「もう俺は他の食事を満足に食べられないだろうね」と誇らしげに語っていた。贅沢な思いをしやがって。栄養失調で死んでしまえばいい。

他にも、一緒に帰っているときに石ころにつまずいていたこととか、一年以上通ったはずの帰り道を間違えそうになって慌てふためきながら「ちつ、違うんです・・・！」と必死に何かを誤魔化そうとしていたこととか、ほんの少しだけドジな一面も覗かせる出来事もあったりする。自分が夢宮たちと一緒に帰ることは、自分が一人で帰る時と五分五分になってきた。その中で新たな一面の彼女を見ることが増え、確かに彼女は小早川ついでに自分にも心を開いてきたようである。クラスでは冷静沈着を守り抜き、他のクラスメートからはきつと暗い子だなとか思われているのだろうが、自分たちだけは本当の彼女に出会えているという満足感でいっぱいだ。人間に絶望している自分が言おう。夢宮は本当に良い子だ。小早川にはもったいないくらいだ。

おや、小早川からメールがきたみたいだ。毎度コイツは日記の邪魔をしてくれる。内容はこう書いてある。

『ありがとう。付き合えることになった。いや、決して嘘じゃない！・・・本当にありがとっっ』

・ ・ ・ この物語が幸福感に溢れた成長物語などに見えるかい？

第四話 「大体八時間」

NOW HERE 〔傍観者〕

第四話「大体八時間」

どうしたものかね。小早川と夢宮が見事に結ばれてしまったのだ。ほとんど一目惚れに近い恋愛だっただろう小早川の恋は大成功をおさめた。夢宮が何故小早川の告白にOKを出したのかは謎ではあるが、まあきつと自分の知らないところで男らしさを見せつつあったのだろう。・・・ここで一応念を押しておくが、実際のところ小早川が恋愛に成功したことを妬んではない。だが、あの小早川がこれから目の保養を独占することになるのは少し気に入らないという程度であった。祝福してやろう。努力のたまものだ。本当に、事實は小説より奇なりという言葉が当てはまる。おめでとうだ。

次の日、案の定浮かれた小早川が自分の机まで駆け寄ってきた。当然「もう終わったー」という言葉は発していない。朝の八時くらい、教室内に人が自分たち二人しかいないというのもあって、小早川はそのまま天に昇っていてもおかしくないような喜び様だった。手をパタパタ震わしながら教室内をぐるぐる回りだしたり、聞いたこともないような演歌を口ずさんだり、黒板に「漢」とか大きく書いてみせたり、どうしようもない落ち着きのなさだった。手の付けようのない幼稚園児を見守る母親の気分を知った数十分だった。

「サンキュー水谷、アイム・・・アイム・・・ベツ、ベリーハッピー！ サンキュー！」

「良かったな、夢宮と付き合えて」

「お前にだけには教えてもいいらしいから、お前にだけは言うさ。ありがとよ」

「そりゃあどうも。でも他の人にばれることなく付き合っていくのは結構難しいぞ」

「今まで通りさ。これまで何度も一緒に帰ってきたけど、まあ誰にも発見されることなく過ごしているじゃないかあ」

「弁当のときも、な。・・・んで、ラブメールは早速昨夜したわけですか」

「ああ・・・それは・・・」

小早川は突然下を向いて自嘲するような笑みを浮かべて説明を入れた。どうやら彼女の携帯電話は日曜日の帰りにどこかで落してしまっただけらしい。何度も家と駅の間を往復する夢宮の姿が頭に浮かんでくる。きつと小早川のメールを一通残らず大切にデータフォルダに保存していたのだろう。あまりにも可哀想だ。家でしくしくと泣いている彼女を想像するだけで胸が痛くなる。しかし今はもう、これからの幸せを二人で築き上げていけばいいじゃないか。

その後しばらく小早川のテンションは上がりっぱなしだった。人が来るとすぐさま黒板にでかかど書き殴られた文字を消し、ぶつかって乱れた机などを戻すなどして、自分の方へ振り向いては「てへ」などとウィンク混じりに笑って見せた。そろそろ気持ちが悪い。

こうして朝のホームルームの開始の合図が校内全体に響き渡る。遅刻指導にリーチを掛けそうな愚か者たちがチャイムの終わりとほぼ同時に教室内に滑り込みをして、セーフセーフとジェスチャーを入れながら担当教師の第一声を待っている様子を眺めるのがここ最近の趣味でもある。どうして彼はこうギリギリを求め続けるのであるのか。一つ前の電車に乗るだけでも遅刻は簡単に真逃れることが出来ると言っのに。さらに彼らはその時間では必ず遅刻するという電車には乗ってこない。遅刻するか否かの瀬戸際の電車をピンポイントに狙って乗車し、登校しているのである。日々スリルを味わって

いるのかもしれない。自転車は知らん。結局、今日遅刻した戯け者は無様にも廊下で待たされる羽目になり、週明けにして来週の五日間の朝に無償労働することが義務付けられていた。まさに馬鹿者だ。朝っぱらから笑わしてくれてありがとう。感謝しよう。

「おや、今日は夢宮が来ていないのか？」

教壇に教師という職を持つ人間が生徒に尋ねた。誰も知らない様子である。自分は小早川に目を向けてみるが、彼も把握していないようだった。ついさっきまでニヤついていた表情が一変している。そりゃあそうだ。夢宮と付き合ってまだ何時間も経っていないはずだ。小早川の報告によると、日曜日の夜八時くらいに付き合ったとか言っていた。そうすると計算で十三時間ほどであろうか。学校で目を軽く合わせて照れながら下を向くといった付き合いたての恋人同士がよく行つコトをしたかつたろうに。あいにく携帯が壊れているそうで連絡手段もない。ホームルーム終了後、授業の準備時間に充てられるはずの休み時間も虚しく、小早川は机に筆記用具さえも用意しないで自分の元にやってきた。自分は片手に本を、片手で授業準備を、の体勢を崩さずに彼に耳を向けてやった。夢宮が病弱なのは元より知っていたことだ。今さら何を不安に思うと言うのだ。

「だけどよお、そのお・・・よお」

言いたいことが言葉として具現化されないようだ。一気に弱気になる小早川。その移り変わりはあまりにも滑稽だった。ビデオカメラで撮影をしておけばよかったと後悔するくらいに。それを見比べて感想文を原稿用紙二、三枚勢いに任せて書きたいほどである。いや、そのギャップの明確さはメモリーディスクを使わなくても記憶を辿って振り返られるほどだったから今すぐにも感想文は書ける。

「水谷、どう思う？」

「だから、彼女は前から病弱だっただろう」

小早川は「そうか」と口にはしながらも顔には不安の顔が消し切れないまま机に戻って行った。小早川は腕に鉛が乗ったようにゆっくりと机の中に手を伸ばしていき、授業の準備を始めた。きつと彼にとつてのこの一時間は無意味なまま終わるだろう。チャイムが鳴り、授業は始まった。同時に小早川は腕を枕に睡眠することを選んだらしい。残りの授業もそうしっ放しであった。帰りのホームルームまで寝続けていた小早川は真っ赤になった手を振って教室のドアを開いて真っ直ぐ家に帰って行った。

自分は掃除当番だったため彼に同行することもなく、砂が撒き散らされた教室を箒で適当に掃いて終わらせた。その後自分はすぐに帰ろうと思ったのだが、ふと明日に提出物があることに気付いて自分の机に戻るとノートを開いて課題に手をつけた。普段は家に帰ってから宿題をするのが自分の常であった。その日だけ、その日だけ学校でやるうと思っていたのだろう。それとも運命か。今思うと聞くべきではなかった。自分はある人の会話を小耳に挟んでしまった。

「異常に大人しい夢宮さんか？」

「そう、学年一、容姿が綺麗だと言われている女子よ」

「それは少し誇張だろ。でも可愛いよなあ。で、夢宮さんがどうしたんだい」

数人の女子や男子が机に座りながら話している。やはり小早川が目をつけたのは間違いではなかったらしい。夢宮は確かに可愛いのだ。自分が見てもそう思える。今夏に、いつも目がお世話になってます、と暑中見舞いを送りたいくらいだ。その彼らの話に興味を持ったのか、何だろうと思って耳を傾けたのも普段の自分にはありえな

い行動だった。だからその時自分が聞き耳を立てたのは運命だったように思えるわけだ。もちろん、聞いていても聞いていなくても結果は何も変わりやしなかったのだが。

「あの夢宮さん、可憐でお淑やかな人だと思ってたんだけどなあ」

「やり手だったのね、あの子。誰と付き合っているの？」

「それがな・・・」

その言葉に続いたのは、自分がもつとも聞き慣れた名字だ。そう、紛れもなく、小早川。彼と夢宮が付き合っているのが早速クラス中に広まっていたのだ。何故だろう、分からない。だが、大した興味もない。別に取り上げるような問題でもない。聞き耳を立てていたのは認めざるを得ないが。堂々付き合えばよいのだ。課題を終わらせた自分は、定着しつつある習慣、片手に本を持って下校するスタイルをとると体が勝手に下駄箱の方に動いていた。結局家に帰ったときには夢宮と小早川のこと忘れ、本に全神経を集中させ続けた。

次の日、あんな事が起きようとは知らずに。

朝、いつものように早い時間から登校している自分は静かな道を淡々と歩き、活字を目で追っているうちに学校に着いていた。この時間帯には自分と小早川、夢宮くらいしか来ない。夢宮は小早川と仲良くなつてから早く来るようになった。この一日前には原因不明の休みをとっていたのだが。自分のクラスの扉を開くとやはりそこには小早川がいて、その教室内の空気は進学して初めてこのクラスに訪れたときのようにであった。小早川は「おはよう」の一つも言わずに自分の前へ歩いてきた。少しだけ背を丸めて、手はポケットの中に突っ込み、数センチ下がった顔は自分の目を見上げるように凝視している。何も喋ることなく、ゆったりゆったり寄って来た。

「どうしたんだ」

自分から言葉を発することは滅多にないことであつた。その不気味さ故、質問の一つを投げ掛けなくなつてしまつたのだ。その一言に反応する小早川。眼を軽く見開いて、閉じていた口を少しだけ開かせた。時が止まっているように感じるのは、彼がゆっくりと歩いているせいではない。圧迫されているような、胸をえぐられているような、嫌な気分。そして、スローモーションの彼が急に動かし腕に反応することはできずに自分の肩はがっちりとその手で掴まれた。少しだけ、痛い。

「・・・ど、どうした？」

「どうしたじゃねえ。この机を見ろよ」

自分を掴んでいない方の手で夢宮の机を指した。ピントを指の向けられた方へ合わせていく。自分までゆつくりと、十分の一の世界に引き摺り込まれたような。まだ威圧感が自分の体内時計を狂わしている。ようやく焦点が合わさつたところで自分は目を疑つた・・・いや、この瞬間までは忘れていたが、意外性はない、なるほど思えるような光景が映つた。机には鉛筆で書かれた文字がびつしりと埋め尽くされていた。「小早川」の三文字。それが幾つも夢宮の机に綺麗に羅列している。昨日誰かの会話を聞いた通りだ。この二人の関係を誰かが妬んだのか。隠れ夢宮ファンの悪戯なのかもしれない。

「お前と夢宮さんは付き合っているんだよ・・・この悪戯はやり過ぎだと思っけどね。どうしたんだよ、怖い顔して・・・！」

自然と含み笑いが表情に表れるのを感じた。彼の眼はなおも自分の目を睨み付け続けている。あの調子の良い小早川徹はどこに行つた

のだろう。幾つかの間が開き、小早川は声を発した。

「お前がやったのか？」

「そんなことないさ」

「じゃあお前は何で誰かに言っただ。俺と夢宮が付き合っていることを」

「言っていないけど」

「嘘だ。俺はお前にしか教えていない。夢宮は学校に来ていない。お前が言ったとしか考えられない」

あまりの不明さに、自分は口が止まってしまった。反論しても無駄だと言うことに気付いたからだろうか。小早川は自分の右肩を突き放して、自分の机を蹴り飛ばして帰って行った。その後、他のクラスメートが戻ってくるまで、自分は動けなかった。

第五話 「何も変わらない」

NOW HERE 〈傍観者〉

第五話「何も変わらない」

「おい、水谷くん・・・どうしたんだ？」

そう言ったのは恐らくクラスメートであろう男子。エナメル性の白いバックを机に置いてから自分の方へ駆け寄った。しばらく困惑のために体を全く動かせていない自分の姿を見て、気が利くことに倒れた机を元の位置に戻してくれた。

「今、小早川とすれ違ったんだが、アイツが机やったんだよな？」

「ああ、そうだよ」

困惑して何も話せなかっただけで、恐怖により硬直していたわけではない。確かなイントネーション、流暢な日本語で返答した。

「アイツ・・・頭大丈夫かよ・・・。高校生にもなつて。付き合ってたからって調子乗っているよな。いつもは下位の層にいるのに」

まさか同級生に「高校生にもなつて」と批評されているなんて小早川は想像していないだろう。自分もこんなことを言う人を見られるのはこれが初めて最後だと思った。名も分らない彼は小早川が出て行ったドアを向いて言う。それに、その彼といつも一緒にいる自分の前で言うべき言葉でない文句までしつかり添えてくれた。突っ込みを思わず入れたくなったが、どうでもいい反論なので口を慎むことにした。それは事実であるのだ。自分たちはいつもサブキャラだ。集合写真の端っこが似合う、クラスメート。

「この机は誰がやったんだろうな。ま、きっと女子だろうな。夢宮が可愛いからって理不尽にも憎んでいたよ。それで小早川なんかと付き合うから、馬鹿にする意味でこんなことをしたのかな。くだらない」

おそらくその仮説は正しいだろう。全くもって下らない話だ。しかし、何故彼と夢宮が付き合っていることが漏れたのかは謎のままであった。先日、宿題の取り組み中にそのことを噂する人の会話を聞いて感じたものと同じだった。何で勝手に自分が濡れ衣を着せられなくてはいけないのだ。夢宮が言ったのだろうか。いや、付き合ってから数時間後の昨日、学校を休んでいたのでその可能性は低い。舞い上がっているうちに小早川が知らぬうちに誰かに言ったのかもしれない。まあ、どうでもいいや。自分は机に座って本の続きを読み始めた。彼は「大丈夫か？」と聞いてきたが、「うん」の二文字でも満足したらしくエナメルバックを置いた机に戻っていったようだった。椅子を引く音が聞こえる。

学校が機能し始めた。朝の号令が何気なく始まり、教師は小早川と夢宮の欠席を不思議がるような顔を見せた。夢宮はこれで二日連続の欠席だった。後ろの人がクスクス笑っている。耳障りだ。そう思いながらも一字一句正確に耳に入ってくるのは近頃自分がおかしいからであろうか。「駆け落ちでもしたんじゃないかね？」とか言っている。彼が教室を出て行った理由が本当にそれならば、将来ブログか何かのネタとなって役に立つだろう。

それから普段よりも落ち着いていた一日を過ごすことが出来た。ページをめくる手が忙しく動く。有意義な一日となりそうであった。偶然にも今日読んでいる本は分厚い小説だったために一日で読み終えることなく、学校生活のあらゆる暇をつぶしてくれていた。久

しぶりの体験だったため、極上の気分だ。風呂上り、マッサージチエアに座りながら読書をしている時くらいの至福に感じられた。

あつという間に次の日だ。自分の行動は学生として決められた行動と暇つぶしの読書と夜に日記を書く以外は何もない。無駄が一つもなかった。夕飯を食べた、お手洗いにいった、風呂に入って体をふき、歯を磨いて眠りについた、など定着した習慣など描写する必要もないだろう。文章に表すまでもなく、次の日がいとも簡単に訪れるのである。

しかし自分の至福は「日々」に修飾することなく途切れた。朝、偶然にも登校している夢宮を発見したのである。ゆっくりと歩いている夢宮を追い越したのだ。横目で見た彼女は一層沈んだ表情であった。体調不良を訴えて保健室に駆け込む仮病常習犯のような顔。でもこれは偽りのない顔だった。夢宮は自分の袖を掴んで自分の足を止めた。あまりにも突然の行動に、自分は本から目を離して彼女の顔をじつと見ていた。

「私……どうしよう……」

森の中で食糧も尽きて道に迷った赤ずきんちゃんのようにか細い声を出す。最初は予言者かと思った。学校では既に夢宮と小早川が付き合っていることが知られている。それを避けていた夢宮が憂鬱そうな顔で途方に暮れていることを示すセリフを吐いたからだ。当然、どうしたのですか、と聞く。予言能力を手に入れたの、という新しい展開など毛頭期待していないが。

「私、実は一昨日学校に行っていたの……」

一昨日と言えば、彼が付き合ったと朝っぱらから自分に自慢してい

た日だ。何故教室に入らなかったと問うてみると、

「実は、一昨日の朝、廊下でクラスの女子に・・・その・・・色々言われたの・・・」

夢宮は実に言い辛そうにそう言った。「色々言われた」を「いじめられた」と解釈してよいだろうか。昨日の名前も分からないクラスメートが自分に言った仮説は確かであるようだった。もともと嫌っている女子があまり顔の優れない男子と付き合ったのをいいネタにして馬鹿にしてきたのだろう。人にバレることが嫌だと言っていた彼女にとってこれはあまりにも酷な現実である。

「やつぱり・・・小早川くんが言ったのかな・・・」

「分からない。何で皆知っているのか自分も知りたいくらいだよ」

「・・・小早川くん・・・酷いよ・・・」

こんな言葉を聞くだろうとは想像もしていなかった。もちろん、僕が夢宮たちと話している時以外に彼女らのことを考えることはほとんど無いのが大きな理由ではあるだろうが。きっと夢宮は自分がクラスメートからどういう目で見られているのかを知っていたのだろう。自分は昨日、小早川と入れ替わりで入ってきた名も知らぬクラスメートAの仮説を聞くまで何も知らなかったというのに。彼女はクラスメートから良い目で見られていないことを悟っていて、小早川と楽しく話していると小早川にまで非難の目が向けられることを想定していたのかもしれない。ましてや恋人の関係になったらどうなるか。いや、そうだとすると「酷いよ」の発言は出てこないか。結局こんなに性格の良い可愛い子でも自分自身のことばかり考えているのだなと興ざめしていると、

「小早川くん・・・何か言っていた？」

夢宮は自分にそう問いかけた。とりあえず歩きましょうと提案してから、自分は答えた。

「うん。水谷が言ったんだろ、って一方的に。机を蹴とばして帰って行った」

「・・・・・・・・」

無言の返事が間を埋めた。その後、自嘲するように夢宮は一人話し続けた。高校に入学する前から何人もの人に告白されてきたが、真剣に付き合おうとする男は誰一人といなかったこと、だからと言ってすぐに断ろうとすれば女子からは僻まれ、受動的な行動しかできずに毎日が息苦しかったこと、だから騒がしい人とは関わりを持ちたくなかったということ。

「小早川くんは違うつて思ってたのに……。机を蹴るなんて・・・」

「まあ、人間にはそう一面もありますよ」

度々敬語をいれたりいれなかったりするの、まだ自分が夢宮の扱いに慣れていないからだ。そう言っ自分 pockets に手をつ込んで、近くに見える学校の天辺あたりを見た。そして学校に着いた時、下駄箱の前にも夢宮は自分の靴を脱ごうとはしなかった。前に持ったバックを両手でつかみ、やはり目を下に向けているだけ。そうかと思うと、番号の若い方下駄箱を開いた。小早川の下駄箱だった。中には少し古臭く、使い込んで廃れた靴が置いてあった。いつも彼が履いている靴。

「来てるんだ・・・」

「まあ、そうだろうな」

すると夢宮は、「今日も休むことにします。やっぱり、まだ彼には会えない」と言つて足を一、二歩後ろへ持つて行つた。自分は認識したことを伝える適当な言葉を言つと、夢宮はお辞儀をしてから学校を去つて行つた。何故学校に来たのか問いたくなる行動であつたが、きつとそれは理屈でも論理でも説明できない不安定な心が夢宮をそう動かせたのであろう。自分は常日頃の行動を思い出したかのように読み物に目を映す。そしてのたのたと歩いて行つた。

あと一回だけ角を曲がれば教室に着く場所で、見知らぬ女子生徒に声を掛けられた。異常にスカートの丈が短く、髪の毛にパーマをかけた子だつた。ここで分かりやすく説明を添えておくと、このような女子こそ夢宮が苦手としている女の子なのである。自分に話しかけてくる人はほとんどいないので心構えをしていなかっただけに驚いた。彼女が軽い自己紹介するまで、彼女が自分と同じクラスだということに気付かなかつた。彼女はいろいろとしちめんどくさいくさいことを自分に聞いてきた。夢宮と小早川のことについてだ。

“高校生にもなつて”、他人の交際にいぢやもんをつけるのはどうかと思つたが、彼は付き合つていることはどうでもいいと付け足した。ただ、小早川が自分に怒鳴る、机を蹴とばす、彼らが休んでいるという不審な行動について質問してくるのだ。

一昨日、小早川が「お前にしか教えない」とはしやぎながらも真剣な眼つきをしてそう言つてきたのだから小早川との約束は守つておこうと、自分が直接二人の交際について聞いたことを話さないようにしていた。しかし、今日の前にいる女子生徒が「水谷が最初に小早川から教えてもらったんでしょ？」と確認してきたので、どうしてかと逆に質問すると彼は簡単に答えてくれた。話によると、彼は一昨日の朝の今頃に学校に来ていて、騒いでいる小早川と自分の会話を聞いていたのだという。それを聞いて自分は首を前に振つた。

小早川は自分に言ってきたのだと。もう事件は解決した。ちつとも面白くないが笑ってしまう。小早川が大声で秘密を簡単に喋るからである。それを聞きつけた彼女が他の人に漏れなく広めたのだろう。これは予測にしか過ぎないが、廊下でばったり会った夢宮をもの見事に侮辱し、からかってやったのだろう。紛れもなく小早川の自業自得だった。夢宮には気の毒な話だが。

それ以来、自分は誰とも話さない日々を過ごすことになった。普段から小早川以外の人に話しかけられることはないし、その小早川はてつきり勘違いして自分に悪意を抱いている。別にどっちでも良いことだった。自分には本がある。何の苦も味わうことなく、日々を経過させていった。一週間ほど、夢宮は学校に来なかった。朝のホームルームで遂に自分が読書していたことが見つかり、毎度教卓に立つ大人に注意されるようになってから連絡事項が耳に入ってくるのでクラス状況を知りやすかった。本がないと数分であるとはいえ退屈であった。ふと辺りを見回す。小早川がふてくされながら頼杖をついている。あの日以来、小早川は自分と同様、誰とも話していなかった。それだけではなく、とりあえずメールアドレスだけ知っているクラスメートから誹謗中傷の嵐が巻き起こる。物に当たる、他人に切れるといった弁えの知らない行動に軽蔑視され、しまいには夢宮が連日休んでいる理由も彼のせいだと言われていた。これはホームルームが終わってから授業が始まるまでに聞こえてきた話し声だった。いつしか、夢宮を影で嫌っていただろう女子たちも、矛の向きを変えたようだった。既に誰も夢宮を憎む人は誰一人としていないように感じられた。

しかし、自分の日常は何も変わらないし弊害もない。

第六話 「告白」

NOW HERE 〔傍観者〕

第六話「告白」

小早川が独り、自分も独り、そんな日常が続いた。小早川は独りに慣れていないのだろうか、授業と授業の合間必死になって寝たり、はたまたチャイムが鳴ると保健室に行くとか言いだしたりしていた。顔色も青く、俯いたまま一日を過ごすようになっていた。小早川は夢宮が学校に来ていない理由を知らない。休んでいるのはただの風邪、自分が二人のことをクラスメートに伝えたと信じ込んでいた。夢宮の風邪が治ったら騒がしくなって可哀想だなと心配していると思われる。しかし、それにしても夢宮が学校を来ない日が続くので、きっと小早川も勘付いたのかもしれない。クラスメートの誰かが夢宮にそう告げ、それを苦痛に感じ取った夢宮が登校拒否しているのだと。短い間ではあったが、今までこれほど夢宮が休んだ日は無かったはずだ。きっとその真実を仮説にしたに違いない。そうなると、小早川はさらに自分を憎む。アイツが人に言っていないければ、と。小早川が騒いでいたのをクラスメートに聞かされただけという単純な理由なのに。自業自得だと彼に言いたい。しかし、自分から言うのは面倒くさい。別に彼が何をどう思おうとどうでもよかった。ただ、自分は自分の毎日を生きているだけだから。

しばらくすると夢宮が学校に来るようになった。信じていたはずの小早川のせいで自分が不幸になっている、そう彼女は思っているはずだ。だから夢宮はきつと小早川に話したくないだろう。いや、クラスメートの誰とも話したくないのだろう。騒がしいのをこの上なく嫌っているのだから。話しかけるとしたら自分だろう。しかし現在のクラスの様子を知らない夢宮にとって、自分に話しかけるのも

騒がしくなるキツカケになると疑っているのかもしれない。

少し前の話になるが、何故夢宮が小早川を一方向的に疑ったのかが分からないでいる。というのは、最初は小早川がクラスメートに言つたと考えるのは当然の成り行きなのだが、自分は夢宮に「小早川が『水谷がクラスメートに言つたんだろ』って言つてきた」と言つたはずだ。その時に落ち着いてさえいれば、小早川が他のクラスメートに言つてはいないということが分かるはずであろう。ここで小早川が嘘を吐くとは考えられないしメリツトもない。

小早川は夢宮が学校に来たらどうするつもりなのだろうか、と自分は夢宮の顔を久しぶりに見てそう思った。そして夢宮もどうするのだろうか、と。きつと小早川が言えば二人の間柄は回復するかもしれないと思つた。いくら五月蠅いコトを嫌う夢宮でも、小早川が自分の意思で人に伝えたわけではないと知れば許してくれるはずだろう。いや、そうならないかもしれない。今の夢宮は、机を蹴とばして自分を一方向的に疑つた、夢宮が知らなかった小早川の性格を知つてしまっているからだ。

自分が考えた結果、夢宮は何の行動もとらない。騒がしくなるからだ。そしてきつと小早川を軽蔑しているからだ。そして小早川も動くことはない。夢宮が自宅から一步も動いていない間、小早川はクラス中から矛を向けられていたからだ。小早川がいけば必ず夢宮の周りが騒がしくなるだろうし、それをクラスメートが防ごうとするのが目に見えていたからだ。小早川が帰りの時間を狙つて夢宮に話しかけるかどうかは彼次第だ。

教室に入るなりクラスメートから話しかけられる夢宮。今にも泣きそうな顔で人を振り払おうとしたが、声を聞いて安心したのだろうか。夢宮に集る人たちが発したのは心配の声。大丈夫だったか、と

か。本心から告げているのが分かるようだった。この光景はつい興味を抱き、見入ることにした。やはり、現実には小説より物語染みている。面白いシーンであった。一日が経ったときには既に夢宮は普通に受け答えをするまでに立ち直れていた。問題は自分が騒がしいことに巻き込まれること。クラスメートも小早川と夢宮とついでに僕とのいざこざの内容は全部把握しているらしく、言及しなかったのが吉と出たようだ。夢宮は彼らを五月蠅いと思わなかったらしい。彼らは「辛かったね」とかの一言を言うと、見返りの言葉を求めることもなくそれ以上話すのを辞めた。

もともと夢宮とは話さないというのもあって、一日二日経てば夢宮は誰とも話さない日常に戻っていたのだが。彼女もまた、孤独になれている性分だったらしい。小早川と話す以前と同様机の上で次の授業に向けていそいそ準備をし、黙ってその場を動こうとしなかった。じっとしていることに変わりはないが、携帯電話を机の上に出すことはほとんど無いように感じた。少し焦点を変えてみる。小早川は、一応はまだ付き合っている彼女に話しかける素振りを見せなかった。クラスに蔓延した、話してはいけない空気が彼の行動を制限させたようだった。夢宮が時たま見せる新しい携帯電話もトドメとなったのだろうか。下校時に話しかけようともしなかった。

そういうクラスを背景に、自分の安定した日々は刻々と過ぎていく。本を買い、読み、売る。もしくは借りて返す。そして毎日欠かさず日記を更新する。その他は何の特異もない生き方だった。日記は学校で起きたことや読んだ本の内容やらを客観的に述べているだけの日記。大きなコミュニティサイトを使っているせいもあり、無名の日記のくせにアクセス数は意外と多い。コメントはたまに1、2くるくらいなのだが。別に人に見せるために日記を書いているわけではない。ただ、なんとなく習慣化されてしまったから書いているだけなのだ。

あの日から何冊読んだか分からない。その日にち分だけ日記を書いた。どれくらい勉強したかも覚えていない。ただ生きているだけと他人は思っだろうが、娯楽に身を投じる自分は死と全くかけ離れていたし、至福に感じていたのは決して嘘ではなかった。これが自分のライフスタイルだと思い出していたそんな時、形成されていたはずの平静が壊れるのを感じた。

「水谷・・・話がある。今日、放課後に教室残ってくれないか？」
「うん」

即答。断る理由もないからだ。自分の生活に新たな展開は求めているが、受動的にそれが訪れたなら受動的に付き合うべきだと考えているから。小早川が久しぶりに自分に話しかけてきた。またもや読書で時間をつぶし、すぐに帰りのホームルームが始まってすぐに終わる。自分は彼が言われたとおり教室内で待っていた。掃除が終わわり、机の上に置いてあった椅子を戻すと、腰を下ろして読書を開始した。人は、みな部活だ。帰宅部所属の夢宮も帰る。本を15ページほど読んだところで教室は物音しない空っぽな間になった。そして自分は顔を見上げる。斜め右の位置に小早川が立っていた。少し顔は違う方角を向き、ポケットに手を入れて、曖昧としか表現できないような顔をした。面倒くさいことにならないといいが。早めに話が終わることを期待しよう。

「話ってなんだ」
「ごめん。俺、“ひとり”じゃやってけねえ」

弱弱しい声でそう言った。不覚にも顔をしかめてしまった。何を言っているのだろう、彼は。別に自分と小早川はいつでも“一人と一人”だったじゃないか。自分は何の返答もしなかった。そして彼は

今、一人でいるだけ。そんなに辛いのだったら最初から自分に話しかけていればいい。二人になれる。今まで話しかけてきて、自分は適当な受け答えをしてきたではないか。何が現在の彼を苦しめると言うのだ。沈黙を保ち続けていた・・・が、彼の一言につい声が出てしまった。驚きの反応。「え」というたった一つの文字。

「俺を信じてくれよ、前みたいにさ。友達だろう？」

「え？」

目と耳と彼、何もかもを疑った。決して彼が齒の浮くようなセリフを吐いたことなんかの原因なわけではない。自分の頭は混乱することになる。自分は今まで小早川を信じてきたことは一度もない。友達と思ったこともない。ただ、適当に返事をしているだけ。できれば面白おかしく、普通に答えているだけ。

「『え』ってなんだよ・・・何だよ、その反応・・・！ お前まで俺を軽蔑するというのか？」

「いや、悪いが自分はお前のことを今も前も関係なしに信じていない。友達だとも思っていないかった」

率直に頭に浮かんだワードを並べてみた。この発言に何か問題はあるだろうか？ ただ、小早川から話し掛けてきただけ。話し掛けて来たから受動的に返事をしただけ。心を彼に委ねたことは一度もない。あくまでも自分は一人でいるつもりだった。友情を求めてもない。これが当たり前だと慣れてきてしまったからだだろうか、彼の気持ちを察してあげることなくそう言い放った。

「・・・え？」

間は空いていたが、ふいに出てきた疑問形。自分の第一声とさほど変わらないだろう。その時の自分は、彼の反応の意が判らなかった。しばらくの間ができる。二人きり、見つめあるのは気味が悪い。時計を見ていた。確かに一秒一秒が経過しているのが分かる。秒針が一周した。数えていたとはいえ、一週がこんなにも長かったものなのかと疑う。それは普段時計の秒針を見ていないからだだろうが。

「・・・そうか。お前は、そういうやつだったのか」

「自分は自分だ」

何を隠そう自分は自分。表も裏もない。今の自分は正直に生きている・・・つもりだ。小早川は何かを悟ったかのように自分の顔に目を向けるのをやめた。微動だにしなかったその身体を、ゆさゆさ動かし始めた。首を回す。瞬きが普段の二倍くらい増えている。口をパクパクさせる。足をぶらぶら振る。あくびをするポーズまでとった。一步二歩と下がっていく。バックを持って後ろを振り向き、教室のドアにまで歩いて行つた。そして最後に足を止めることなく言うた。

「何故？ 何故お前はそんな人間なんだ？ お前は、裏切り者だ・・・ッ」

その直後すぐに声がなかった。何故、と言われた。何故だろう？ 自問してみる。しばらく答えが出なかったのは、何故自分がこんな考え方を持つようになったのかを忘れていたからだだった。理由を思い出す。いつの日にか、自分はこの考え方になれていた。この生き方に。そして当たり前だと感じるようになっていた。『裏切り』この言葉に自分は過剰に反応したような気がした。裏切る・・・。そうだ、自分は裏切られたくないから・・・。声に出て何度か復唱していた。もうその教室には自分以外の誰もいなかった。

顔を一切動かすことなく、手探りだけでポケットから携帯を取り出し、開いた。日記である。学校の人は知らない日記。日記を観ている人は自分の名前も顔も知らない。昼間のうちに日記を書くことするのとは初めてのことであった。だが、自分は無我夢中になって携帯を開いて自分の日記にアクセスをしていた。一つ呼吸を置いて、一気に左指で書き始めた。

第七話 「独白」

NOW HERE 〔傍観者〕

第七話「独白」

『昔の自分は純粹その物といつても過言ではありませんでした。小学生のころ、自分は人をすぐに信じ、心を全て委ねていたのです。人というものが大好きでした。男も女も関係なしに交友を楽しみました。毎日人と会い、自ら話しかけ、冗談を言い合い、たまに恋をする、ごく普通の生活を送っていました。毎日放課後遊びました。その頃、テレビゲームなどはあまり流行ってはいないので、子供と言ったら外で遊ぶのが定番でした。だから自分も鬼ごっこやボールを使った遊びを飽きることなく繰り返していました。街の探検などもしました。体力のない自分でも、体を動かすことに嫌気がささなかったのです。遊んでいる時心の底から楽しいと思っていました。』

ある日のことです。いつものように自分が遊ぼうと人に話しかけたのですが、一番信頼していた友人の返事は「NO」でした。その頃の自分は交友が盛んでした。クラスメートのほぼ全員と仲が良いと思っていたくらいの純粹な自分は、いつも遊ぶメンバーを片端から誘ってみたのですが、誰もが「今日は無理」の一言。放課後、女子と遊ぶことは滅多にないのだが、思い切って自分は女子に誘いをかけてみます。ほとんど予想はしていましたが、結局放課後は自分一人で過ごすことになったのです。小学生の学校生活初めての経験だったのかもしれませんが。まさか誰とも遊べないとは。家に帰る。ふと周りを見れば、用事があるのか生徒たちが心地よく走って帰っています。初めて一人でその道を歩くのも恐らく初めてだったのでは。寂しい、のそれだけ。だが何もかも信じ込んでいる自分は、何の疑いもなかったのです。彼らは偶然にも予定が入っているのだろう。

何万分の一だろうと確率的には有り得る話なのだ、と。

家に着いて、母が「今日はどこで遊んでくるの？」と問いかけてくるのはいつものことです。家に滞在するのは慣れていない。何よりも人が大好きだった自分に、午前三時から夕飯時まで何をしろと言うのでしょうか。自分はいつも遊んでいる公園の名前と、適当に浮かんだ友人の名前を挙げて勢いよくドアを開けて外に飛び出しました。新しく買ったばかりの自転車に乗り、冒険しようと考えました。

しばらく自転車を心地よく漕いでいると、母親に告げた公園が見えてきました。いつも見る光景。誰かしらが広々とした公園で活発的に遊んでいます。どの学年が占領したのだろうと考えました。近頃自分たちの学年がその公園を占領していたので、今公園を使っている人は幸運だな、とか微笑んでいたのを覚えています。自転車で通り過ぎようとした時、そこには見たくもない景色が広がっていました。ブレーキを踏んで足を止めます。何度目を擦っても、頬を叩いても、目に映るものは紛れもなく自分のクラスメート。左手に大きめの手袋、長くて硬そうな棒、白くて丸い玉。今まで自分はしたことがなかったのですが、流石にこのスポーツの名前は知っていました。野球です。彼らは大声張り詰めて野球を楽しんでいるではありませんか。ベンチにはクラスの女子がキャーキャー言いながら応援をしています。最初、何が何なのか分からなかったのです。公園の前にあるスーパーマーケットに自転車を置き、公園の近くに身を潜めながら自分はその場を動きませんでした。きっと不可抗力ではなかったでしょう、女子の声が聞こえてきます。

「なんで水谷君はいないの？」

「男子が言うには、水谷がチームにしていると負けるから、だって」

「運動出来ないもんね。それにいつもしつこいもんね。結構自己中だし」

「ね。偶数になったし、丁度いいんじゃない？」

「あ！ 相場クンが打った！ キヤー！」

想像もしなかった会話でした。要するに自分は裏切られていたのです。誰からも愛されていなかったのです。普段から外で駆け回っていたのですが、確かに自分は誰よりも体力には劣っていました。それでも、遊んでいる時は対等にやりあっていたはずだと記憶を起こしてみます。鬼ごっことか、泥刑とか。ということは、こういうことなのです？ 自分は鼻からオマケされていたのですか？ 自分を狙うとすぐにゲームが終わってしまうから、本気で走れば自分が鬼であり続けてしまい楽しくなくなってしまうから・・・。

家の近くの河原に座り、酷く悲しみました。涙こそ出ないでいましたが、こう言うときこそ涙が流れればなと目をこすっていたのを覚えています。下を向きながら様々なことを考えました。今までのこと、これからのこと。自分は人からどう思われていたのだろうか、邪魔ものだったに違いない、そんな疑念が後を絶ちませんでした。真っ青な空を見ました。放送が鳴り響くまで雲の流れを追い、しばらくその場に立ちつくした後、家に帰りました。

平穏な日々はいとも簡単に崩れたように感じました。初めて他人の腹の裏が見えてしまったとき、自分はおぞましい気分になりました。面として向き合っていれば話題が尽きることなく笑い合っていた相手が、急に表面上に創造された人物でしかなかったということに気付いてしまったのです。そして自分は周囲の人間そして疑うことに欠けていた自分にさえも絶望し、心を閉ざそうとしてしまうのです。

日常的な出来事にはとことん真っ直ぐ突っ走ることをやめない自分は、その足跡を堂々つけてきた道が間違っていることを悟ってしまい、全ての物事が間違っている他あり得ないと感ずるようになるの

です。そして、その一回の振り向きこそが自分の思考全てを左右させるのです。人を疑って生きていこう、そう思う事にしました。

次の日、自分は誰にも話しかけませんでした。親友だと思っていた人がさらに遠く感じるようになりました。その一日で、自分が話しかけることがなければ、自分の他者との会話はゼロと全くのイコールで繋がるほどの関係だったことに気付きました。この一日をキッカケに、疑心は自分を見るみる疎遠なものにしていったのです。自分の日々は孤独さを増していったのです。

平穏な中にも疑れと言い聞かせる自分は窮屈な思いで日々を過ごしてきました。疑心を絶やすことなく、常に目を光らせてきました。自分は人を疑わなくてはいけないという暗示を自らかけざる得ない状態に追い込められました。もともと人を信じていたがために、信じたい気持ちを抑えながら疑心を絶やさずに生きなくてはいけなくなってしまったのです。

しかし、自分は疎外された独りの自分に耐える精神力を持ち合わせていませんでした。裏切られてから間もないので、その日常の中で自分は疑心を忘れる時も幾度がありました。それは疑いの心を故意に取り除いたわけではなく、その平穏さに満ち足りて、できるだけ精神的に楽な方に自分を持っていくとした結果、自ずとそうやっていったのです。当然彼らは自分を除け者にして野球をしていたことが自分にバレているとは知っていません。急に静かになった自分と前の通り話してくれるようになりました。自分も今まで通り話しかけました。しかし、自分は人と関わる途端にその影に気付いてしまふのです。同じようなことが繰り返されたのです。鬼ごっこをしたときでも、やはり相手はあと一歩のところまで自分を捕まえることを断念してくれるのです。幾ら待っても話し掛けられることはありません。極たまに話しかけることがありましたが、必要な事項以外

は聞いてきません。誘いに断られた時は野球をしていると以外考えられなくなりました。以前と変わらぬ風景のはずなのに、自然と疑念が頭に浮かび上がるのです。それはこの上ない悲しみでした。自分は裏切られるくらいなら、人を疑いながら人との関わりを避けて生きていこうと決めたのです。

疑うことが常になると、待ち受ける結果がどうであろうとそれを影だと気付かないまま、すんなりと受け入れることができていました。暇つぶしとして今まで通り彼らと話しながらも、心の中では彼らが自分に心を委ねていないように、自分も一切の信用を無くして彼らと接し合いました。そう接していると、疑った相手の思考を何かしらの理由で知り、悟った時、自分の仮説は間違ってたかったと再確認する程度で済みましたし、仮に自分の想像と異なっていた場合でも最悪の場合を想定していた自分にとって何の苦にもならなかったのです。途端に自分の心境は平和になってくれました。

仮に、普段は信じているのにふと他人を疑った場合では、疑いが事実であつたら先ほど話した自分のように再確認するだけでは済まなく、疑うまで他人を信じていた自分を恨み、そして一人嘆き悲しむものです。疑う前に事実を突きつけられたら、あの時の自分のように、なおのことダメージは大きいのです。

小学生ながらにして、多くのことを考えさせられました。しかしまだ小学生と幼い頃です。一度決めた決心など、最速一夜にして忘れ去ってしまうことさえあったのです。まだまだ自分の心境は変わり続けます。疑いながらあたかも信じているかのように話す、この複雑な心境を上手にコントロールできなかったのでしょうか。ここから自分はさらに不安定な日々を過ごすことになったのです。人を疑おうとし、でも結局裏切られることに変わりはなく、それを回避しようとう無理やり人から遠ざかってみるが、それでも独りを拒絶し、過

去の自分の意志を思い出し、人を信じて関わってみたくなくて、支えてほしくなり・・・と、中途半端に自分の意思は左右し続けたのです。そして裏切られ、改めて決心して、また人の温もりを欲し、信頼しようとして。その繰り返しでした。

そして確立してしまったのは、心の中で人を警戒しながら行動は他人以上に人間の支えを欲するという矛盾でした。最もこの行動に出てしまったように思えます。最初のうちは何度人も人を信じてしまったり、疑ったり、不安定な状態が続くのです。矛盾を繰り返しているうちに、信じるか信じないか、その二択で自分はいかに疑うことを肯定しました。人を疑っている時の方が、待ち受ける結果が全くもって楽だったからです。昔のように疑わないでいると、裏切られたときにまた悲しい思いをしなくてはいけなくなる。心境が揺らいでいる時、自分が人を信じたとしてもすぐに相手の影を見つけてしまうのですから。何度もうそう考えては挫折してきましたが、なんらかのキツカケがあったわけではないのですが、当たり前のようにそれを受け入れるようになったのです。最悪の状況を想定して生きる、そういう日々慣れてしまったそれだけならまだ良かったのかもしれませんが。いずれ自分は意識的に信頼しないようにするのではなく、自然と人を信じないようになっていき、ついに人が好きでなくなりました。

そして、自分は親の棚に置いてある本を手に取りました。それは休み時間の暇つぶし。慣れませんでしたが、想像以上に面白い内容でした。いつの間にか趣味が読書になっていました。読書カードというのが学校で配られたのですが、自分は誰よりもカードの進行具合が早かったくらいです。

それからの自分は平静を保ち続けて生きてきました。裏切られたくないから人から離れるのではなく、自然と人から離れるようになって

たのです。もうすでに人との関わりに興味がなくなり、今の自分に形成されました。話しかけられたらそれ相応に適当な返答はします。積極的な行動は一切しません。あくまでも受動的に。人を信じるなんて愚か者のする行為だ、そう考えてきました。』

携帯を閉じた。

そうだ。自分は、裏切られたくないからこつ生きていたはずだったのだ。

第八話 「どこにもいない」

NOW HERE 〔傍観者〕

第八話「どこにもいない」

朝の七時二〇分。校舎内の窓に日の光が差し込み、照らされた椅子を引く。前から四番目。右から数えて三番目。席替えをしてまだ慣れない席に腰を下ろした。教科書と本が入ったバックを机の横に置く。ドスツという鈍い音が教室内で響く。凝っている肩を軽く回し、首を横に曲げると骨の音が高らかに鳴った。首を回したついでに教室を眺めるが、この時間帯には誰もいなかった。近頃、早く起きるのが習慣されてしまったため、以前より数十分早い時間に登校することにしたのだ。バックを開け、そこから出したのは文庫本。使い古された紙のカバーで表紙は見えないようにしてある。丁度真ん中くらいに挟まっている栞を頼りにページを開く。栞をはずして、上下に並ぶ小さな活字を読んでいった。これが自分の一日の始まり。

本を読んでいると、時計の進行が全く把握できなくなる。知らないうちに数十分が経過していて、辺りを見回せば朝から汗を流しながら着替えをする運動部員、机に向って今日の国語の授業にある漢字テストの勉強に取り組んでいる人など、クラスの密度は少しずつ増えてきたようだった。真中に席がある自分は、教室の中心にいないのに、どこか違う世界にいるような錯覚に陥った。何故だ。何故こんな気分になるのだ。それは今に始まったことではない。ここ最近、そう自然と感じられるようになったのだ。

あれから数日が経った。自分はいつも通りの一日を過ごしていた。客観的に見ると自分の一日は大きく変わっている。小早川とも夢宮とも話さなくなったのだ。これは自分とは関係のない話なのだが、

小早川は孤独に耐えられなかったらしく遂に夢宮に話しかけたようだった。きつと頭を下げたのだろう。既に夢宮の周りで騒がしく集る人はもういない。もう何の問題もない。小早川が付き合ったことに感動し過ぎてはしゃぎわめいたこと、自分を一方的に疑ったこと、机を蹴とばしたこと、それらの愚行を反省して謝ったのだろうか。そこら辺のやりとりは分からないが、教室の右端の席で仲良さそうに話している二人の姿が見える。クラスの人も騒がないし、堂々と付き合っているようだ。おめでとうと言ってやろう。

いや、そんな言葉を言う機会はない。小早川も夢宮も、当然クラスメートも自分に話しかけることは一切なくなったのだった。読書の時間が増える。自分にとっては何も問題が無かった。むしろ好都合と言っても良いほどだった。いつものように活字を追って、一日の終わりには日記を書く。そんな充実した毎日を送っている。

八時四〇分。担当の先生が号令を促す。号令係なる人が「気をつけ、礼」と言う。ガラガラと椅子を引く音がする。全員が座った。教卓の前で先生は幾つかの連絡を生徒たちに告げる。どうでもいい内容だった。生徒会が委員会の人を召集している。文化祭実行委員会がはたらく季節か。文化祭をより楽しめそうな委員会に見えるが、実際はただ仕事を任され、自分自身は文化祭の表にほとんど顔を出せないという損な委員会である。それをよく知っていた自分はなんとかこの委員会に入らないで済んだ。まあ、この委員会に入らなくても文化祭には参加しないで適当なベンチで読書をするわけだが。

朝のショートホームルームが終わった。次の授業はなんだっただろうか。まあ、何でもいい。教科書ノートはいつも机の中に入っている。先生の顔を見てから準備をしても遅くはないだろう。漢字テストなど、どうにでもなる。バツクの中から文庫本を取り出した。また栞をはずして、気になる続きを読み始めた。

受験に関係ない授業は机の下でこっそり本を読んで過ごしていた。六時間授業はあっという間に終わり、すぐに帰る準備をした。帰りのショートホームルームも適当に聞き流し、礼を揃ってしたあと、椅子を机の上にあげて後は掃除当番に任せる。よし、帰ろう。

やはり帰り道には誰もいなかった。大抵の生徒が部活動に励んでいるからだ。歩きながら本を読む。これもまた日常。少しの物音がすれば顔を見上げて、何者かの邪魔にならないように端に寄る。安全のためにだ。また、曲がり角を曲がろうとする時も顔を上げる。いつものポイントで顔を上げ、ミラーを見ることなく曲がろうとしたその時だった。顔を上げていなかったら間違はなく正面衝突していただろう。曲がってすぐ、一歩二歩体を後ろに背けて後ずさりした目の前にいたのは夢宮だった。そのまま気付かずにはぶつかって彼女の体温を感じ取っても良かったかもしれない。・・・おっと、それは小早川の発想だった。

「水谷君・・・」

夢宮の可愛い口が微かに動く。正直、驚いた。一つ呼吸を置いてからこの状況を判断することにした。夢宮が曲がり角で何かを待っているかのように立ち伏せているのだ。小早川を待っているのだろうか。この時間帯に学校から離れるのは自分と夢宮と小早川の三人くらいだから。

「小早川を待っているのか？」

「いえ・・・」

そうなると夢宮が何故ここで立っているのかが不明だ。しかし消去法的に自分を待っているとした考えられない。

「どうしたんだ」

「・・・少し話したいことがあるの」

「はぁ、そうか」

あれからずっと夢宮と話していなかった。彼女が何を言ってくるか、想像がつかなかった。だから彼女が自分に話しかけてきたということだけでも驚きのはずだった。だがしかし、この夢宮はどこかいつもと違う雰囲気を漂わせていた。少し真剣さを帯びた表情、冷静な口調でセリフを述べている、そんな気がした。どこか自分に対する威圧を放っているようにも感じ取られる。

「小早川君のこと、本当に友達じゃないって、思ってるの・・・？」
「・・・」

その威圧的な夢宮はすぐさま破綻した。夢宮は途端に目を潤わせたのだ。か細い声で途切れ途切れにそう尋ねてくるのだ。何故だか言葉が詰まる。はつきりと「違います」と言えはいいのに、どうしてかその言葉が喉の前で止まっている。一向に自分を喋らせてくれない。何かが自分の発言を止めている。何も返答しないでいると、夢宮はもう幾つか質問を重ねてきた。

「じゃあ、何でそんな寂しいコト考えているの・・・？ いいじゃない。友達でも、信頼しても。仲良く一緒に、さ・・・」

この間日記に書いた内容を思い出した。自分は裏切られたくない。だから元より他人を信じないし、友人だとも思いもしない。友達とは何だろうか。ただのクラスメート、一緒に過ごしている人、他人所詮そんな存在でしかないと見なしていた。いつの日か、それが常識になっていった。当たり前のように感じていた。だが、日記を書

いているうちに思い出してきた。自分は裏切られたくないからこうしているのだ、と。他人を信じる、少しでも心を委ねる、幼き頃の自分を振り返ってみた。

・・・なんて静かなのだろう。何の音もしない。天気は曇り。少しだけ涼しい。一度夢宮の目を見つめてしまったのが間違いだった。自分の目はそこで固定され、二人見つめ合うことになってしまった。きつと彼女の目には自分の顔が、自分の目には彼女の顔がくつきりと映っているのだろう。彼女の目はまだ潤っている。

「小早川君・・・すっごく悲しんだ。水谷君とは友達だっと思ってた、って」

「・・・」

「小早川君、とっても真っ直ぐな人だよ・・・。だから、絶対裏切らないよ、だからさ・・・」

信じてみたらどうか、と言いたいのだろうか。ついに自分は視線を下に向けた。夢宮のスカートと黒いニーハイの間にある綺麗な脚が目映った。でも何とも感じなかった。ただ視線が下りていっただけ。

「この日記、水谷君のでしょ？」

その言葉に反応した。条件反射のように自分は顔を上げた。脚、スカート、腰、腹、胸、そのあたりに、携帯電話を持つ手があった。焦点を合わせてみる。その日記、確かに自分の日記である。小さい画面に映っている内容は、以前自分が過去について書き綴った内容だった。これをどうして知っているのか、これまた反射的に尋ねた。すると答えは簡単だった。彼女もまた、そのコミュニティの参加者だったからだ。自分は身元バレを防ぐための策をとっていなかった。

たため、プロフィール欄に名前こそ書かないものの、年齢やある程度の地域に住んでいることや学校までも書いてあったのだ（ユーザ登録するときに面倒くさかったため）。

「裏切られたく・・・ないんでしょう？」

「・・・」

「小早川君も私も、裏切りなんかしないよ？ 昔の水谷君みたいに、私たちを信じてよ・・・」

それから、自分が無言を保っている内に夢宮は何度もそれを繰り返した。何度かなど数えてはいない。だが、明らかにそれはしつこかった。自分の有意義な時間が奪われているとさえ感じるまで、それは一向に終わりを見せようとはしなかった。自分は遂に揺らいでいた心境をはつきりさせ、本音を打ち明けることにした。

「だから、自分は君も小早川も最初から友達だとは思ってないんだって。勝手に友人ぶるな」

それが自分の真の本音だった。次に無言になったのは夢宮の方で、何の音も聞こえなくなった。自分はわざとらしくそっぽを向いてみる。女が黙るのは気味が悪い。そして恐い。どんな展開が待ち受けるのか想像できないからだ。

「何よ・・・」

自分はその声でそっぽを向くのをやめた。夢宮が発したとは思えない、深く沈んだ声だった。

「水谷君こそ、裏切り者じゃない」

「・・・」

「小早川君の気持ちを踏みにじって。何が自分は裏切られたくないよ。自分さえよければ他人はどうでもいいってこと？」

「・・・」

「もういいよ・・・。酷い、酷いよ。・・・じゃあね」

夢宮は肩を落とし、バックを体の前で持つという基本姿勢をつくると、後ろを向いて駅の方へと向かって行った。自分は、追いかけるしなかった。そこで一歩たりとも動かなかったのだ。きっと自分はその場で立ち止まっていたのは、夢宮の後ろを歩くのに気が引けたからだけではなさそうだ。

次の日から、本格的に二人は自分に話し掛けることはなかった。どうやらこの先まだ長い高校二年生の生活で、彼らとの関わりは全く無いと言い切ってもいいくらいに感じられた。またこの前のように、夢宮が曲がり角で待ち伏せているという摩訶不思議なコトも起きないだろう。水谷が自分に助けを求めてくることも当然ながらにしない。このクラス内で自分が話し掛けられることは全く無いと断言してもいいとさえ思われるくらい、それは絶対的なものであった。だが別に、彼らが自分に寄り添ってこないところで自分の生活に何の影響も及ぼさない。ただ自分は読書をしているだけだった。

だが、何だろうか。

何か、この胸のあたりで残る蟠りのようなものが

これもまた、消えてなくなることはないのだろうと、絶対に予測できた。

第八話 「どこにもいない」 (後書き)

最後までありがとうございました。評価・コメントしてくれると嬉しいです。よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2649f/>

NOW HERE ~ 傍観者 ~

2010年10月25日17時06分発行